

## 1 背景とねらい

病虫害防除において、最近の栽培法の多様化、病虫害の発生動向の変化などから、これらに対応した的確な防除法の開発とその実用化が望まれている。防除基準の編成にあたっては、本県の病虫害発生様相、防除効果、及び安全性の面からも適用性が高いと考えられる薬剤を採用してきた。平成8年度の防除基準で新しく採用・変更した主な薬剤の特性、使用法について解説して、指導上の参考に供する。

## 2 技術の内容

平成8年度病虫害防除基準に新たに採用した主な農薬は、水稻いもち病の育苗箱施用による防除に採用してきた従来剤（ビームS粒剤）の製造中止にともなう代替剤、麦の雪腐病に対する種子消毒による新しい防除法である。その使用法と使用上の留意点は以下のとおりである。

### (1) トリシクラゾール・カルボスルファン粒剤

対象病虫害：水稻 いもち病（葉いもち）・（初期害虫）

一般名：トリシクラゾール・カルボスルファン

剤型：粒剤（トリシクラゾール5.5%、カルボスルファン3%）

商品名：ビームガゼット粒剤55

人畜毒性：劇物 魚毒性：トリシクラゾール A類相当 カルボスルファン B s類相当

#### 薬剤の特性

いもち病の防除効果をもつトリシクラゾールと、イネミズゾウムシ等の初期害虫に防除効果があるカルボスルファンの混合剤である。

使用方法（病虫害防除基準採用分）は表1のとおり。

#### 使用上の留意事項

(7) 従来剤（ビームS粒剤：トリシクラゾール4%、80～100g/箱）は、一般的な残効（防除価80以上）期間が60日程度で、葉いもちの発生が極端に遅い場合を除き通常の移植では7月中旬までは発生抑制効果が期待できた（平成元年参考事項）。これに対し、本剤は箱当たり投下分量（トリシクラゾール5.5%、50g/箱）が少なく残効性もやや劣る。発生が多い場合は7月上旬までしか残効が期待できない場合があり、特に周辺圃場に早期発生田（坪状発生含む）等の発生源がある場合や多肥栽培圃場では7月中旬から本田を巡回し、発生が認められたならば直ちに茎葉散布による葉いもち防除を行う。

(イ) 殺虫剤成分が入っている分コスト高になるので、初期害虫の発生状況を充分考慮して実施する。

(ウ) 施用にあたっては「育苗箱施用上の留意事項」を厳守する。

表1. 葉いもち病に対するビームガゼット粒剤55の使用法

薬剤名	作物	適用 病害虫	使用量	使用時期	本剤及びトリシラフ -ルを含む農薬の 総使用回数	本剤及びカルボス ルフアンを含む農薬 の総使用回数
ビームガゼ ット粒剤55	稲	葉いもち	50g/箱	移植前日 ～ 移植直前	4回以内 (但し、本田期 3回以内)	1回

注) 初期害虫に対する防除効果・使用上の注意はガゼット粒剤に準じる。

(2) イミノクタジン酢酸塩液剤塗沫処理による麦類種子消毒

対象病害虫：麦類の紅色雪腐病

一般名：イミノクタジン酢酸塩液剤

商品名：ペフラン液剤25

有効成分：イミノクタジン 25%

人畜毒性：劇物 (5%以下普通物)      魚毒性：A類相当

薬剤の特性

予防効果、治療効果を有する接触型の殺菌剤で、散布および塗布剤として使用する。本剤は病原菌の孢子発芽、付着器形成、侵入菌糸の伸長を抑制する。

使用方法 (病害虫防除基準採用分) は表2のとおり。

使用上の留意事項

(7) 塗沫処理：ビニール袋に2～3kgの種子を入れ、所定量の薬液を徐々に加え、薬液が種子によく付着するように激しく振とうする。処理後は数時間風乾する。

(イ) 本剤で種子消毒した場合、紅色雪腐病対象の根雪前茎葉散布は不要である。

(ウ) 雪腐褐色・黒色小粒菌核病には効果がない。

(エ) 本剤による種子消毒は紅色雪腐病の他、なまぐさ黒穂病、斑葉病、赤かび病にも有効と考えられるので、その他の種子消毒は不要である。

表2 麦類紅色雪腐病に対するペフラン液剤25の使用法

薬剤名	作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用時期	使用回数	使用方法
ペフラン 液剤25	麦類	紅色雪腐病	10倍液 50ml/kg (乾燥種子)	播種前	3回以内 (散布は 回以内)	塗沫処理

3 指導上の留意事項      各薬剤毎に示した。

4 試験成績の概要      省略